差出人: NewsMail - metaFrontier.jp, LLC <newsmail@metafrontier.jp>
送信日時: 2014年3月11日火曜日 10:43
宛先: info@metafrontier.jp
件名: メタフロンティア ニュースメール Vol.24 (2014/3/11)

各位

いつもお世話になっております。
メタフロンティア合同会社の柴田賀昭です。

弊社が関わる業界団体の活動に関し、ファイルベース関連のトピックやセミナー情報、
その他各種ご案内などを不定期にてお届けいたします。

本メールの転送はご自由です。まわりにご関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、
どうぞ遠慮なくご共有ください。

また配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作を
して下さい(宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入
していただければ自動的に削除されますので、どうぞご遠慮なく。

◆目次――――――――――――――――――――――――――――――――――――

- 柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」
- EBU(European Broadcasting Union)発
- SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers)発
- その他
- メタフロンティアからのお知らせ

◆柴田賀昭の「ちょっとお茶でも。。。」――――――――――――――――――――――

- 第 12 回　”仕事のやり方は、みんな標準化活動が教えてくれた”

　今や会議室でプロジェクタを見かけるのは当たり前の光景となりましたが、かつて
学会発表などでオーバーヘッドプロジェクタ(OHP)を利用していた世代の筆者にとって
大勢の聴衆に対してプレゼンをやるための道具との認識しかなかったプロジェクタが
少人数の会議でも″使えるツール″であるということを強く思い知らされたのは、まさに
前職で深く関わることとなった MPEG(ISO/IEC JTC1/SC29/WG11)会合でした。

　初めての MPEG 会合参加は 1998 年 12 月の MPEG ローマ会合でした。これに先立ち、
MPEG に関わるということで、何に使うのか良く判らないままに初めてノート PC を支給
され、しかし現地で実際に参加して判明したのは、ノート PC がなければ全く仕事に
ならない、という驚愕の事実でした。

　「かつては書類を 300 部印刷して持参したものだ。」といった先輩の話も伺いましたが
MPEG では早くも 1996 年頃から全ての関連文書を専用の MPEG 文書サイトで管理していた
ようで、会合へ寄書(議論のネタとして、技術提案や活動報告などを記載した会合への
入力文書)を提出する場合は、いわゆる文書アップロードで済みました。
　その結果、文書提出の締切が早々に設けられ、会合の直前まで文書作成にいそしむと
いったことは困難でした。しかし、その後 MPEG-7 の技術提案や作業部会運営にも深く
関与するようになり、時には数十ページの寄書を複数、準備するといったことも
ありましたので、「300 部の文書持参」を経験せずに過ごせたのは幸いだったのかも
知れません。

　また、当時はまだ Wi-Fi 環境が今ほど整ってはいませんでしたので、出発前の準備と
しては、他のメンバーが作成、提出した関連文書を前もってに手元にダウンロードして
おくといった作業もありました。そして、その保存先はもちろん、先述した携帯用の

ノートPCでした。

ただ、それはノートPCの役割のほんの序章に過ぎません。会合では全ての成果物を出力文書(共通ルールとして、MS Wordの利用が義務付けられていました)として提出することとなっていましたので、議論をして何らかの結論を得た後は、項目毎にそれらを文書化する担当者を決め、翌日にはそれを、全体をとりまとめる主編集担当者(メインエディタ)にフロッピーディスクで提出して(当時はまだUSBメモリなんて洒落たものはなく、3.5インチのフロッピーディスクが大活躍の時代でした！)、ひとつの出力文書にまとめてもらう、といった作業が待ち受けていたのでした。

つまりMPEG会合の場では、ノートPCは文字通り、仕事に必要不可欠な「筆記用具」の役割を果たしていた訳です。

さらに議論が翌日に持ち越しとなった場合などは、作業部会の取りまとめ役は、当日の議論のポイントや合意点、そして翌日に議論すべき課題などを簡潔にまとめたパワポ(MS PowerPoint)スライドを作成し、翌日の会議に備えました。
あるいは議論の行方によっては会合期間中に急きょ分科会が設置されることもしばしばありましたが、その取りまとめにアサインされた場合は、同分科会の目的や進め方、期待アウトプットなどをまとめたパワポを大急ぎでとりまとめ、その最初のキックオフの場でプレゼンしたものでした。

それまで経験した学会発表などのプレゼンといえば、前もって時間を掛けて凝った発表スライドを準備するものばかりでしたので、当初、そのようなアドホックなスライド作成には面食らったところもありました。しかし人間、まあ場数を踏めば慣れるものです。後半には必要なポイントのみを簡潔にまとめたスライド(それは往々にして単なる箇条書きと簡単な図だけの味気ないものだったりするのですが)を短時間で作成できるようになりました。

あと、プロジェクタでWord文書を投影していたのを初めて見た時は、正直ちょっとした驚きでした。もちろんPCからすればそれは単なるモニターの一つに過ぎませんので技術的には至極当然なことです。ただそこには、「プロジェクタはスライド(パワポ)を投影するためのもの」といった思い込みがあったように思います。

そしてMPEG会合での、このWord文書投影の極め付けといえば、会合の締め括りとして開催されるClosing Plenaryと呼ばれるイベントでした。MPEGでは会合毎にResolutionsと呼ばれる会合決議文書を発行するのですが、これが20～30ページにも渡るWord文書、そしてConvenor(MPEG全体の代表者)は、これを会合参加者全員(300名以上！)の前にプロジェクタで投影し、その内容を一字一句読み上げて確認していくのでした。

もちろんその内容に修正して欲しいところがあった場合は会場からコメントが発せられ、時にはそれが更なる議論を巻き起こすこともありましたが、Convenorはこれをうまくとりまとめ、衆目の中、最終成果物である当のWord文書自体をその場で修正していくことで、いわゆるオープン性を担保していたように思われます。

Closing Plenaryは会合最終日の午後一に始まるのですが、それが終わるのは大抵深夜のこと。まあ担当者としては自らの関係する部分(筆者の場合はMPEG-7)だけを集中して見ていれば良かった訳ですが、これを仕切っていたConvenorはそんな訳にはまいりません。ConvenorであるLeonardo Chiariglione氏のパワー(そして議論の捌き方！)には、毎度のことながら驚嘆させられていました

MPEG会合への参加は、MPEG-7 Ver.1.0を発行した2001年7月のMPEGシドニー会合が最後となりました。その後、厚木へ異動して業務用VTRのメタデータ関連に関わることとなり、その一環として今度はSMPTEに参加することとなりました(実は筆者が今もSMPTEで取り組んでいるUMID(Unique Material IDentifier)とは、この頃からの"お付き合い"です)。ただ、当時はまだメタデータ技術の黎明期でもあり、SMPTEでメタデータを担当していたメンバーの半分以上が既に顔見知りだったもので、初参加の折、冗談交じりに"Mr. MPEG-7! Welcome to SMPTE!!"と言われた時には何だか懐かしい気持ちになったことを思い出します。

尤も、SMPTEは米国の業界団体ですから参加者の多くは米国人であり、その会話は当然ネイティブ英会話です。当初はこの速度に全く付いて行けず(今でも怪しいですが^^;;)、英語を(母国語でない)"公用語"として用いているMPEGとの違いを思い知らされました。

さて、SMPTEでは会合全体をとりまとめるPlenaryなどはありませんでしたが、会合の機会を用いて作業部会の公式/非公式なF2F(Face To Faceの意)会議を実施し、その結果を踏まえた報告スライドを急きょ作成して上位の技術委員会に報告するというのはMPEG会合と同様であり、ここではMPEGでの経験が大いに活かされた次第です。

それから10年近くが過ぎ、今度は自らの意思で2011年7月のシドニー会合からSMPTEに再び関わるようになりました。そしてその間、標準化活動をサポートするITツールも大きく様変わりしました。
まず、Wi-Fiによる常時接続が当たり前となり、この結果、関連文書を事前に手元にダウンロードしておく必要はなくなりました(尤もこれは、ノートPCが最早、一時も手放すことができない道具になってしまった、ということでもありますが)。次に、かつては外付けHDDの接続で運用していたSMPTEの文書サーバが、今や各作業部会の文書管理やメンバー登録からプロジェクトの進捗管理までを包括的に取り扱う統合プロジェクト支援システムへと変貌を遂げていました。

そして最大の変化は、インターネット環境さえあればもはやどこからでも会議(これは作業部会のそれのみならず、SMPTE会合自体も含めて)にオンラインで参加できるようになったことです。その結果、いわゆる出張費を大幅に抑制することが可能となりました。
尤も殆どの会議が欧米からのメンバーが中心となりますので、会議の開催が日本時間の真夜中になってしまうことがなかなか辛いところではありますが。。。(それに、音声だけでネイティブの議論に付いていくのも、相当辛いところもあります^^;;)。

ちなみに現在、弊社が提案した「UMID応用原理」に関するSMPTE標準規格文書ドラフトはそのFCD(委員会最終ドラフト)化を審議する投票の段階にあります(本コラムの執筆時点では、最終結果はまだ出ていません)。ここに至るまでには、プロジェクトの関係者やSMPTEの"大御所"からの厳しいレビューコメントも頂戴し、正直当初は不愉快な思いをしたこともありましたが、冷静になって読み返してみるとその殆どが非常に重要な指摘であり、見方を変えれば、わざわざ貴重な時間を割いて私どものドラフトをしっかりと読み込んでくれた結果でもありますので、目下、これらのコメントに正面から立ち向かいその対応を検討しているところです。

さて、ひょんなことから昨年末よりV-Lowマルチメディア放送の立ち上げに関わることとなり、その一環として2014年2月から電波産業会(ARIB)に入会させていただきました。
ARIBといえばBS/CS/地上デジタル放送を始めとした国内の放送技術の標準化に務めてきた業界団体であり、技術の標準規格の策定という機能的な点からみれば、筆者がこれまで経験してきたMPEGやSMPTEと大差はありません。ただ実際の物事の進め方はかなり様相が異なっており、ある意味で新鮮な"逆カルチャーショック"を受けています。
えっ、それは具体的に何かって?、またまた長くなってしまいましたので、それについては、また機会を改めてご紹介したいと思います。

◆EBU(European Broadcasting Union)発――――――――――――――――――――
- EBU Tech-i 第19号(2014年3月)が発行されました。
  http://tech.ebu.ch/docs/tech-i/ebu_tech-i_019.pdf

- "Where broadcast meets broadband"をテーマに3/26(水)-27(木)の日程でGenevaで開催予定のBroadThinking 2014が、引き続き参加者を募集中です。
  https://tech.ebu.ch/events/broadthinking2014?newsletter_march2014
  (プログラム)
  https://tech.ebu.ch/docs/events/broadthinking14/bt14_programme_web.pdf

- 3/28(金)にGeneva で開催予定のワークショップ"Integrating Broadcast Receivers in Handheld Devices 2014"が、引き続き参加者を募集中です。
  https://tech.ebu.ch/events/ctnworkshop14?newsletter_march2014
  (プログラム)

https://tech.ebu.ch/docs/events/ctnworkshop14/ctnworkshop14_programme_web.pdf

- EBU Tech 3364: "Audio Definition Model - Metadata Specification"が
  発行されました。
  https://tech.ebu.ch/news/new-tech-3364-is-the-key-to-pandora-s-b-26feb14?newsletter_march2014
  (EBU Tech 3364)
  https://tech.ebu.ch/docs/tech/tech3364.pdf

- EBU もメンバーとして参加する Joint Task Force on Networked Media (JT-NM)が、
  そのフェーズ 2 として参照アーキテクチャの定義に取り組むこととなりました。
  https://tech.ebu.ch/news/no-let-up-in-pace-for-jt-nm-as-phase-2-b-28feb14?newsleer_march2014

- 6/3(火)-4(水)の日程で Geneva で開催予定の"MDN (Metadata Developer Network)
  Workshop"が、発表論文の応募を開始しました。締切は 3/30(日)です。
  https://tech.ebu.ch/events/mdn2014?newsletter_march2014

- 6/24(火)-25(水)の日程で Geneva で開催予定の"NTS (Network Technology
  Seminar 2014"が、まもなく参加者の募集を開始します。
  https://tech.ebu.ch/events/nts2014?newsletter_march2014

◆SMPTE(Society of Motion Picture and Television Engineers)発━━━━━━━━━━━━━━━━
- SMPTE Newswatch 2014 年 2 月号が発行されました。

http://campaign.r20.constantcontact.com/render?llr=iwnzoxjab&v=001e5WobZtxxKRd_XGS64h-YAubA5xA9_XYiRnOMFKShg2qOfDhtSJNXpUB1hTGi_Zw9WLSZ3FXR1rMMgrlYcdI7iUl16fhTGW3FC2ozgEM3FpDVnBxMO3DKL8dftOclOn9YO52a4h1ZnS8qVat8VpgG63kkGqWYy1OgvhyXUsQF2fZfqsd_brSUSMOoJQ3T_xaUMC1Ey8B8rsbtpOXgynxFumO9p8ot6ANHOyuOhlO8rh13yT48UDue2Q5Cmy3JSPOtahzyJ1jbY-OV6IiwlKicpWCPXQzroOt

- SMPTE 標準化コミュニティ Atlanta 会合(2013/12/9-13)の活動報告が発行されました
  https://www.smpte.org/sites/default/files/2013-12-Atlanta%20Outcome%20Report%20Final.pdf
  なお、同会合において、2014 年 6 月の会合を東京で開催予定であることが報告され、
  その後、当該会合が、6/2(月)-7(金)の日程で東京都千代田区紀尾井町の千代田放送会館
  で開催されることが正式決定しました。

- 10/21(火)-10/23(木)の日程でハリウッドで開催予定の SMPTE 2014(SMPTE 年次技術会議)
  が発表論文の応募を開始しました。締切は 6/20(金)です。
  https://www.smpte.org/cfp2014

- "Lessons in Light: From Reality via Display to the Eye"なるタイトルのオンライン
  セミナーが、3/21(金) 2:00(日本時間)から開催されます。

https://www.smpte.org/webcasts/lessons-in-light?utm_source=Webcasts+-+March+2014+%236&utm_campaign=PDA&utm_medium=email

- SMPTE Monthly Newsletter 2014 年 2 月号が発行されました。

http://myemail.constantcontact.com/SMPTE-Monthly-eNewsletter---February-2014.html?soid=1109962569416&aid=9kpqXev0IOY

- "Quantum Dot Color for Motion Pictures and Television"なるタイトルのオンライン
  セミナーが、4/2(水)2:00(日本時間)から開催されます。

https://www.smpte.org/webcasts/quantum-dots?utm_source=SMPTE+MONTHLY+-+February+2014&utm_campaign=Monthly&utm_medium=email

◆その他 ━━━
- 欧米の主だった業界団体が、メディアファイルの相互運用性に関する新たな共同
  タスクフォースを立ち上げました。

http://www.prweb.com/releases/jointtaskforcemedia/SMPTE/prweb11583840.htm

- 米 Avid Technology 社の NASDAQ 上場が廃止されることとなりました。
  http://blog.devoncroft.com/2014/02/24/avid-to-be-delisted-from-nasdaq-on-february-25-2014/

- 米 Dolby 社が、米 Doremi Labs 社を 92.5 百万ドルで買収することとなりました。
  http://blog.devoncroft.com/2014/02/24/broadcast-vendor-ma-dolby-to-acquire-doremi-for-92-5-million/

- Mr. MXF こと Bruce Devlin 氏(AmberFin CTO)による無料オンラインセミナー
  "Bruce's Shorts - Tip of the Week..."(日本語字幕付)が、好評配信中です。
  http://www.amberfin.com/shorts-jp/

◆メタフロンティアからのお知らせ ――――――――――――――――――――――
(新着情報: http://metafrontier.jp)

- 3/3(月)～7(金)にて開催された SMPTE 標準化委員会 Niagara 会合において、柴田賀昭が、SMPTE UMID 応用プロジェクト(UMID 応用 SG 及び RP205 改定 AHG)の活動報告をおこないました。
  http://metafrontier.jp/drupal/sites/default/files/info/umidAppReport140306.pdf

- 「この戦略製品・サービスを特許で守るにはどうすればいいのだろう？」とお悩みの方はいらっしゃいませんか？また、「出願はしたもののその後の対応が不適切で拒絶査定を受けてしまった。」とか、「何とか特許は取ったものの競合に簡単に回避され、結局はカネの無駄に終わってしまった。」なんて悩みもしばしば聞かれるところです。
  モノづくりによる差異化が厳しくなる中、新たなビジネスの展開において特許制度の戦略的な活用がますます重要になってきました。ここで戦略的な活用とは、単に思い付きのアイデアを特許出願することでなく、そのビジネスの展開においてその特許の目的や役割ををきちんと見定め、最小の費用で最大の効果を狙うということです。
  すなわち、まずはその製品・サービスのどの部分が特許で保護できそうかといった検討から始め、次に、特許出願とは技術情報を公にすることであり、またその権利化までには相当の時間と費用が掛かることを踏まえ、それは本当に特許を取得すべき技術内容かどうかを様々な側面からしっかりと検討する必要があります。
  そして一旦出願すると決めたならば、特許庁の厳格な審査に耐えて権利化を獲得すべく、十分な先行技術調査のもと先行技術に対する優位性を明確に訴求する必要があります。
  特許出願と言えば一般的には特許事務所の仕事と考えていませんか？もちろん最終的に特許を出願する時には弁理士への依頼が必要です。しかし彼らの商売は御社に出願してもらって初めてナンボの世界、つまりそこには、必ずしも御社のビジネス、製品戦略に最適の助言ができるとは限らない構造的な問題があります。
  さらに技術分野が細分化、深化する中、ひとりの人間がカバーできる範囲には自ずから限界がありますので、必ずしも御社の発明内容を本当に深く理解できる弁理士に担当してもらえるとは限りませんし、ましてや御社のビジネス戦略上の選択肢のひとつとしての知財活用のあり方などは、一般的に彼らの専門領域を超えた範疇の話となります。
  最近、前職において 40 件以上の出願をおこない、その後知財部署に異動してその 3/4 以上の権利化を達成した経験[1]を見込んでいただいたクライアント様から、特許出願に関するご相談を承り対応して参りました。ここでは、単に特許出願のみならず、自らの経験に基づいた国際標準化活動なども勘案したビジネス戦略上の活用方法などについてもアドバイスをさせていただきました。
  私どもは弁理士ではございませんが、前職にてビジネス戦略における特許制度の活用方法を様々な側面から深く調査研究した経験があります。さらに自ら発明者として多数の特許を出願し、また知財担当としてそれらの多くを権利化した実績があります。
  ただ私どもの専門分野はあくまで映像技術あるいは IT/マルチメディアですからそれ以外の、例えば化学や医療関連といった分野では門外漢です。
  つきましては、もし御社で特許に関するお悩みや相談事などがございましたら、

是非ご支援をさせていただきたく、まずは弊社(info@metafrontier.jp)まで
お気軽にお声掛け下さい。
[1] これまでに柴田賀昭が出願、取得した特許の一覧です。
http://metafrontier.jp/drupal/ja/about/members/patents

- ファイルベースワークフローを導入したものの「こんな筈ではなかった。」とか
「何とか使ってはいるものの完全なブラックボックス状態で、万一の時が不安。」
などといったことでお困りのユーザ様はいらっしゃいませんか？
特にこれまで親しんできた技術トレンドとは"非連続"な IT ベース技術が業界に
急速に広がるにつれ、ユーザ様とベンダ様との会話がうまくかみ合わず、関係を
損ねてしまったといったお話もちらほらと伺っております。
ファイルベース技術は今も日々改良が進められているものの、残念ながら現時点
においても、(ベンダ様を問わず)ユーザ様のあらゆる要求を完全に満足できるような
ソリューションが提供可能な技術レベルには達しておりません。
従ってファイルベースワークフローの導入を本当に成功させるためには、ユーザ様、
ベンダ様が互いの深い信頼関係の元、技術とコストの兼ね合いから、その時点での
「ベストソリューション」を互いに切磋琢磨しながら探っていくといった姿勢こそが
最も大切なことであります。
弊社ではファイルベースに関する豊富な技術知識を元に、ベンダニュートラルな
立場から、ユーザ様とベンダ様が相互理解をより深めて「ベストソリューション」を
見出すための"技術通訳"といったお手伝いをさせていただきたいと考えております。
つきましては、何かお困りのことがございましたら、まずは弊社(info@metafrontier.jp)
までお気軽にお声掛け下さい。

- MXF(Material Exchange Format)の出張セミナー、引き続き好評提供中です。
"MXF は初めて"という方々を対象に MXF が絡むビジネス判断をおこなう上で必要と
される MXF 技術の基本知識の習得を目的とした「基礎編」と、
これから本格的に SMPTE の MXF 関連規格書を読みこなしていく方々を対象に、その
前準備として必要とされる MXF 技術の全体像の把握を目的とした「応用編」をベースに、
御社のニーズに応じたかたちにカスタマイズして提供させていただきます。
その他、ご要望により XML(eXtensible Markup Language)の基本や FIMS 等の技術
セミナーにも柔軟に対応させていただきますので、まずは弊社(info@metafrontier.jp)
までお気軽にお問合せ下さい。

今回のご紹介は以上です。
ここまでお読み下さり、ありがとうございました。

本メールは、弊社スタッフがこれまでに名刺交換させていただいた方や、弊社 HP からの
お問い合わせの際、アドレスをご登録いただいた方などにお送りしております。

配信停止を希望される方は、お手数ではございますが本メールに対して返信操作をして
下さい(宛先: newsmail@metafrontier.jp)。その際、一行目に「配信停止」と記入して
いただければ自動的に削除されますので、どうぞご遠慮なく。

また本メールを転送などで受取られた方で、今後の受信を希望される場合は、一行目に
「配信希望」とご記入の上、お名前、会社名(あるいは所属組織名)を添えて下記宛先に
ご連絡いただければ、次回から送信させていただきます。

また本メールに関するご意見、ご感想などがございましたら、こちらも下記宛先にお送り
下さい
(宛先: request4newsmail@metafrontier.jp)。

編集/発行 : メタフロンティア合同会社 柴田賀昭
〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川 1-13-12 アーバンビル 6F
URL: www.metafrontier.jp

Copyright (C) 2012-2014 metaFrontier.jp, LLC. All Rights Reserved